OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代における会話文特立符号種の消長
Author(s)	鳩野, 恵介; 古田, 雄佑; 岩城, 佐和 他
Citation	語文. 2008, 91, p. 69-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代における会話文特立符号種の消長

鳩野　恵介　古田　雄佑
岩城　佐和　川那邉惟奈

一、はじめに

日本語の表記体系における会話文特立符号種、即ち会話文を地の文から区別するための符号種は、近代に至って大きな発達を遂げた。現在では、発話には「　」を用い、また本文に対する註釈などには（　）を用いる、という緩やかな規範が存するが、このような規則については、明治四十五年（一九一二）刊の『作文講話及び文範』で夙に言及されている（原文旧字旧かな）。

「　」『　』（　）――などの符号も句読に準じたものである。通例「　」は文章中人物の詞に用い、『　』は書名などに用い、あるいは時として人物の詞の中にまた他人の詞を入れる場合に用いる。（略）また（　）は註解のようなところに用いる。これは洋文のまねであるが必要な場合があるので行われている。――も西洋のダッシュの輸入で、用法は（　）とほぼ同様である。（芳賀矢一　杉谷代水編『作文講話及び文範』一四五―四六頁）

かかる諒解事項が成立するためには、ある程度のスパンと試行錯誤を経なければならなかった。殊に明治前中期は、次の引用でも言及されているように、種々の会話特立符号種が存立し、様々の試みがなされていた。

明治二〇年前後には山田美妙、巌谷小波などの小説で、会話や心内語などの引用語句を〃で挟んで示す形もみられた。（略）他に（（　））を使った会話文も、この時代の山田美妙や尾崎紅葉にみられる。（略）明治二〇年代前半は会話文の形式の過渡期であり、以後も「　」でなく（　）や（（　））を使ったり、発話者の名を示したりする形がしばらく行われ、

また、幸田露伴や樋口一葉のように、引用符を使わず会話文を地の文に織り込んで示す古典的な形も長くみられた。しかし、明治二〇年代後半になると「……」の形が小説の会話文として次第に広まり、明治三〇年代には一般的な形式として定着するに至った。

（「近代小説にみる会話文の変遷」『句読点、記号・符号活用辞典。』所収、一一三―一四頁）

本稿では、この記述を検証するため、特に明治期の文人に照準を定めて、会話特立符号が「　」ないし『　』に収斂されてゆく過程の一斑を明らかにしたい。文献はなるべく単行本（初版）に拠ることとし、引用文の字体もできるだけ本文に従った。

しかるに文学作品の表記を考える際には、手稿や初出誌に遡ることが要求されもしよう。山下浩『本文の生態学―漱石・鷗外・芥川』（日本エディタースクール出版部、一九九三）が述べるとおり、単行本の段階でも、句読点レヴェルで「出版社が主導し」て変更のなされた作品も見られるので、果して単行本の表記をそのまま作者の意図の反映と見てよいものかどうか、疑義は残るのである。

それでもなお、後に引く紅葉の証言（二―二参照）からも分るように、明治二十年代を中心として活躍した作家は、それ以降の作家と較べてみると、特定の会話特立符号を意図的に用いたと考えられ、その点において、出版社や編者の介入は極めて軽微なものであったと思われる。本稿で硯友社同人を調査対象の中心としたのはそのためである。

二、会話文特立符号の種類

二―一、発話者を表示するもの

明治初期の文学作品では、作中の会話部に発話者を逐一表示することがしばしばある。これは、戯作や滑稽本の表記方法を踏襲した形式とおぼしい。このことに就いては、江湖山（一九六四）も言及している。

江戸時代の戯作文芸作品では、話し手がだれであるかを、初めに必ず書き、話し手が違っても行を改めない。この書き方は魯文の作品はもちろん、坪内逍遙の「一読三歎当世書生気質」（明治一八より）、末広鉄腸の「政治小説雪中梅　上編」（明治一九）、須藤南翠の「雨窓漫筆緑蓑談前編」（明治一九）なども踏襲している。

（江湖山一九六四、一三九頁。傍線引用者、以下同）

これらの他に、たとえば宇野（一九六四）に挙げられた諸作品にも同様のものがみられる。宇野氏が引用した作品の特徴を私にまとめておくと、次の如くである。

1. 尾崎紅葉『風流京人形』…会話文に（　）を使用、発話者表示も逐一有り。

2. 巖谷小波『五月鯉』…会話文に「　」のみ使用、閉じ括弧は使用せず。なお、会話の一部は＝＝で区別している。

3. 山田美妙『情詩人』…会話文に「　」を使用、会話前には新行一字下げが行われている（連載第四回から形式が統一）。

4. 延春亭主人『散浮花』…会話文に括弧は使用せず、（留）や（女）などのように、発話者を符号的に表示する。

宇野氏は、「いわゆる会話文の示し方には（略）大きく分けて二つのものが区別されるのである。一つは行頭をあけるもので、他の一つは補助符号を使うものである」（三十九頁）と結論しているが、ここで稿者が補足しておくと、「補助符号を使うもの」には二種あって、ひとつは発話者を表示するもの（1と4）、いまひとつは発話者を表示しないもの（2と3）であり、発話者を表示するものはさらに、A. 他の符号と併用して示すもの（1）と、B. 発話者表示のみのもの（4）とに区分することができる。

ここで、発話者を表示する例を以下に八例挙げておく。

○假名垣魯文『雑談安愚樂鍋』（明治四年刊）
○川島忠之助譯『新説八十日間世界一周』（明治十一年刊）
※領「龍動ヨリ來リ玉フカ　フヲツグ「然リ
○三遊亭圓朝　若林玵藏『談牡丹燈篭』（明治十七年刊）
※侍「コレ藤助其天水桶の水を此刀に注けろと命れバ最前より戰慄へて居りました藤助は　藤「ヘイとんでもない事になりました（略）
○末廣鐵腸『政治小説雪中梅』（明治十九年刊）
※老母「マア藥は止ませう
○江見水蔭『田毎源氏』（明治三十年刊）
※泥「合点だ。呑込んだ。　金「合圖の船歌。
○坪内逍遙『三讀當世書生氣質』（明治十八年刊）
※（吉）まいつた〳〵いふべからず〳〵
○山田美妙『夏木立』（明治二十一年）の一部
※（珊瑚）この私を摑まへて「貴様は贋物」だと言ひましたぜ。
○二葉亭四迷『新編浮雲』（明治二十―二十四年刊）
※（昇）ヲヤ此様（こん）な惡戲をしたネ

前半五例はA. 他の符号と併用して示すもの、後半三例はB. 発話者表示のみのものである。Aに属するものは、閉じ括弧なしのカギを用いて会話文を表示する。しかし四迷の『浮雲』には、閉じ括弧なしの「　で会話を区別する例と、「　」によって会話を区別する例とが見られ、前者は特に前半部、後者は特に後半部に偏って見られるようである。あるいは、会話を特立するための一般的な用法が未だ定まっていなかったために、同一作品内にそのような揺れが見られるのかもしれない。

以上から、会話部分に発話者名を表示して、なおかつ符号を用いる場合、閉じのカギは必ずしも用いられた訣ではないと言える。この事実は、開きのカギが「庵点」の変化したものであるという

大熊（一九九五）の説を支持するものであろう。

大熊氏は、『和蘭医事問答』（安永二年＝一七七三刊）における「スポイト」「キリステル」等のように、外来語を特立させる符号を便宜的に「鉤括弧（甲）」と名づけ、一方の「会話文の部分を示す鉤括弧」を「鉤括弧（乙）」とした[1]。そして大熊氏は、後者「鉤括弧（乙）」の成立について、「開きの部分は庵点から、閉じの部分は鉤画から変化したものだと考えられる」と結論した。

「鉤画」に関しては、太宰春臺『和讀要領』に次の如くある。

> ○太宰春臺『和讀要領』（享保十三年＝一七二八）
> 段落ヲ分ルニハ。鉤—畫ヲ用フ。章—首ニハ「ヲ用ヒ。結末ニハ」ヲ用テ。前後ヲ隔—斷ス。皆是ヲ鉤—畫トイフ

これによると、鉤画は章首にも結末にも用いるということになる。併し、明治十四年の伊藤圭介「日本人ノ雅俗文章ニ於ケル句讀段落ヲ標示スルヲ以テ必要トセサルハ。一缺事タルヲ辨ス。」（『東京學士會院雑誌』二ノ一〇）には、「段落ニハ。鉤畫ヲ」用キ。其結尾ノ前後ヲ劃斷スベシ」とあるし、また明治四十四年の國語研究會『國定新讀本 句讀法及分別書方』にも、「カタカギ（片勾畫）とは」で、「韻文の終り竝に文の段落を切らうとして餘白の無い場合に施すものである」（三十六頁）とあり、少くとも明治期の文献では、章首に用いる鉤画に言及したものを見ない[2]。ともあれ、このようなカギの用い方は、「段落」の発生と密接に関わるものであろう。たとえば亀井（一九九三）も、稲垣千穎松岡太愿編『本朝文範』（明治十四年刊）の「 」一事の全く竟（境）たる處に此標を附く」や「一一事の暫ク竟たる處に此標を附く」を引いた上で、「ヨーロッパの文体論から啓発されてもいたであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や「などの記号は明らかに段落という発想の影響だった」（四頁）と述べている。また宇野（一九八二）は、「例えば、『我楽多文庫』の第一号（明治二十一年五月）に、紅葉山人の「風流京人形」が掲載されているが、再版本では一行の字詰めが異なっているために、第二段落の終わりが行末に来ている。それで、かぎかっこの閉じる方の符号に類する形の活字を用いて、段落末であることを示している」（四十五頁）と述べ、一般に「区切り符号」と呼びならわされるものには、「切れ目を示すということに主眼のあるものと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの両方が」（四十七頁）含まれることに注意を喚起するが、この両方の性質とも兼ね備えたような鉤括弧も、明治期には間々見られた[3]。

因みに、会話特立符号種として「 」が大体定着した後にも、なお発話者を表示する次のような例が見られる。

> ○尾崎紅葉『金色夜叉』（明治三十一—三十六年）
> ※甘「遖は交際官試補！」
> 佐「試補々々！」

風「試補々々！立つて泣きに行く……。」
荒「馬鹿な！」

但し『金色夜叉』には、発話者を逐一表示せずに、「　」のみで会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物が発言する場合、混乱を回避するために敢えて発話者を表示したとも見ることが出来る。同様の例としては、江見水蔭『命不知』（明治二十九年刊）や、紅葉の初期作品『風流京人形』（明治二十二年刊）が挙げられる。そこで、次節で調査対象とした作品のうち、発話者が表示されているものは、差当って考慮から外しておくことにする。

二―二、符号のみで会話を特立させるもの

前節でも触れたように、明治期の文学作品における会話文特立符号としては、現在と同じく「　」も用いられたが、その他にも『　』や（（　））、＝＝など様々の符号種が用いられていた（このことは、大正期以降に（（　））や＝＝が全く用いられなくなった、ということを意味するものではないが[4]、それらはごく散発的な例に止まっているとは言えよう）。

さて尾崎紅葉は、「文盲手引草」（明治二十二年発表）において、次の如く述べている。

お玉杓子（ダブルクォーテーションのこと―引用者註）の道行は日本文には似合からずとて私は（（　））こんな風に書換て用たれどあとで見ると佛蘭西にて既に此形を用ふ（略）此外に『　』（こんな）のと＝（こんな）のあり（略）「　」を使ふ處に『　』を使ふもよし「　」は鐵の鍵にて『　』は銀の鍵なり　役目にかはりはなけれど銀の鍵は容躰に見ゆるとて喜ぶ人あれどそも〳〵驕奢の沙汰なり

同様のことは、明治三十七年『新小説』第九年第一巻の山岸荷葉「故紅葉大人談片」でも述べられているが、明治二十年代には複数の会話特立符号が用いられたことや、それが個人の嗜好を反映しうることなどが語られており、興味深い（実際に紅葉が作中に『　』を用いた例は見られない）。

以下、同時代の用例を符号種別に幾つか見ておく。

①『　』を使用したもの

○大江（巖谷）小波『當世少年氣質』（明治二十五年刊）の一部
※鎭雄は心中冷笑つて、『なんの……燕雀めら。』――但し鎭雄大が相手にせぬだけ、（略）

②（（　））を使用したもの

○尾崎紅葉『二八比丘尼色懺悔』（明治二十二年刊）
※（（左様か））　と聲をうるませ　（（玉傷は……））
○巖谷小波『當世少年氣質』（明治二十五年刊）
※（（若様！　モシ若様！　御車が參つて居ります！））
と、云ひながら乘せ様とすると。
○江見水蔭『鎌わぬ坊』（明治二十九年刊）
※（（何時の間に其様な。灸の痕さへなかつた躰に））とお縫の尼御前に一本參られける。

③＝＝を使用したもの

○石橋思案「言文一致に附いて」（明治二十二年三月三十一日付『讀賣新聞』）
※言文一致を攻撃するお方ハ＝江戸ッ子の書いた言文一致ハ上方の者にハ丸で譯が分からない、だから言文一致は至ッて區域が狭い＝とおッしゃいますが（略）
○石橋思案『京がのこ』（明治二十三年刊）
※＝それは〳〵＝と私を慰めてくれました。
○浩然堂主人「鷗外生の『明治文章の月旦』を讀む」（明治二十三年二月三日『日本之文華』）の一部
※鷗外生曰く＝議論文中、輕妙なるもの、實に氏（田口卯吉氏）を以て第一とす＝と、（略）

更に調査範囲を拡げて、作家ごとにどのような符号を用いているかを、明治二十年代を中心として五年間隔で調べた。その結果を簡単に纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯友社同人六人の作品である。当該作品中に用いられた会話特立符号種を示し、該当する作品数を算用数字で夫々示した。

表によると、明治二十年代までは（（　））や＝＝も見られるが、明治三十年以降になると、会話特立符号が「　」『　』に収斂していくように見える。なお、作家（美妙など）によっては、明治二十年代前半から「　」を既に多く用いた者があるし、また三十年以降でも『　』が未だ広く用いられており、「はじめに」に引いた記述は多少の修正を必要とするが、大体は的を射ていると考えられる。

これを以て、本調査報告を終ることにしたい。（了）

注

（1）假名垣魯文『雑談安愚樂鍋』（木版印刷）では、会話を特立させる庵点と、「　」（鉤括弧甲）とが、明らかに形の上で区別されて用いられている（金属活字ではこの差異が捨象される）。

（2）実例を挙げると、森鷗外『即興詩人』（明治三十五年刊）は段落の末尾毎に」を用いているが、章首に「は用いない。

（3）例えば山田美妙『漁隊の遠征』（明治三十六年刊）は、複数の話し手による会話が連続する場合は、大体、各会話文の初めに閉

じ括弧なしの「　」を用い、そして一連の会話が終了するときにのみ、閉じ括弧で受けている。これに類似する閉じ括弧の用法は、引用文の場合にも見られる。次に一例を挙げる。

○芥川龍之介『開化の殺人』（大正七年刊）
※以下に抄録せんとする予が日記を一瞥せよ。
「十月×日、明子、子なきの故を以て（略）
「十一月×日、子爵は遂に（略）
「二月×日、嗚呼予は今にして始めて知る、（略）されど明子は如何。」

（4）例えば、昭和二十年代の『文學界』（文藝春秋）に連載された古川緑波の記事では、引用部分が＝＝で示されている。

（5）巖谷小波は、『こがね丸』（明治二十四年刊）から約三十年後に、文章全体を書き直した『三十年目書き直しこがね丸』（大正十一年刊）を上梓した。たとえば、

（昨日よりの大雪に、外邊に出る事もならず、洞にのみ籠り給ひて、さぞかし徒然におはしつらん。）と云へば、

とある部分を、

『イヤ大王様！　ひどい大雪で御座りますな。一寸御見舞に参りました。』と、云ひますと、

の如く書き換えている。注目すべきなのは、文体が文語体から言文一致体に改められているのみならず、会話特立符号種も相違しているという点である。小波は、（（　））が既に会話特立符号としては一般的でなくなった現状に鑑みて、『　』を意識的に用いたと考えられる。

【参考文献】

宇野義方（一九六四）「文字・表記の変遷」『講座現代語2　現代語の成立』明治書院
宇野義方（一九八二）「句読法の歴史」『講座日本語学6　現代表記との史的対照』明治書院
江湖山恒明（一九六四）「欧文脈」『講座現代語2　現代語の成立』明治書院
大熊智子（一九九五）「引用符を用いた会話文表記の成立」『東京女子大學日本文學』第八十四號
亀井秀雄（一九九三）「文体の中の記号」『季刊　文学』一九九三冬、岩波書店
小学館辞典編集部『句読点、記号・活用辞典。』小学館、二〇〇七

【参照テキスト】
〈文学作品〉
①の作品群については、「精選　名著複刻全集　近代文学館」、「新選　名著複刻全集　近代文学館」、「秀選　名著複刻全集　近代文学館」、「特選　名著複刻全集　近代文学館」、「名著複刻　日本児童文学館」（ほるぷ出版）の何れかを参照した。複数の作品を収めた本については、参照した作品のみタイトルを挙げた。また、単行本初版の刊行年を併せて示す。
②の作品群については、特にことわりのない限り、「近代デジタルライブラリー」（http://kindai.ndl.go.jp/index.html）の画像を参照した。
①芥川龍之介「開化の殺人」『傀儡師』（大正八年）、巖谷小波『三十年目書き直しこがね丸』（大正十年）、大江小波『當世少年氣質』（明治二十五年）、尾崎紅葉『二人比丘尼色懺悔』（明治二十二年）、尾崎紅葉『金色夜叉』（明治三十一―三十六年）、假名垣魯文『牛店雑談安愚樂鍋』（明治四

年）、川島忠之助譯『新説八十日間世界一周』（明治十三年）、三遊亭圓朝　若林玵藏『雅談牡丹燈篭』（明治十七年）、末廣鐵腸『政治小説雪中梅』（明治十九年）、坪内逍遙『三歌讀當世書生氣質』（明治十八年）、二葉亭四迷『新編浮雲』（明治二十年）、森鷗外『即興詩人』（明治三十五年）、山田美妙『夏木立』（明治二十一年）

②石橋思案『京がのこ』（明治二十三年）『電氣の死刑』（明治二十六年）『破手紙』（明治二十六年）『花盗人』（明治二十八年）『筆と紙』（明治三十三年）、巖谷小波『初紅葉』（明治二十二年）『こがね丸』（明治二十四年）『友禅染（ぬれ浴衣）』（明治二十五年）『當世少年氣質』（明治二十五年）『蝸牛』（明治二十六年）『麥わら笛』（明治二十八年）『春色二本柳』（明治二十九年）『新知事』（明治三十一年）『笑の國』（明治三十九年）、江見水蔭『花守』（明治二十四年）『四本指』（明治二十六年）『水車他六編』（明治二十八年）『速射砲他四十三篇』（明治二十八年）『朝嵐』（明治二十八年）『大軍艦』（明治二十九年）『海底の錨』（明治二十九年）『水の聲』（明治二十九年）『遠山霞』（明治二十九年）『命不知』（明治二十九年）『鎌わぬ坊』（明治二十九年）『田毎源氏』（明治三十年）『海の秘密』（明治三十年）『突貫』（明治三十四年）『新俳優』（明治三十四年）『大幻燈』（明治三十五年）『武装之巻』（明治三十七年）『漁師の娘』（明治三十八年）『新空氣』（明治三十九年）『廢船萬里號』（明治四十一年）、尾崎紅葉『比丘尼色懺悔』（明治二十二年）『風流京人形』（明治二十二年）『初時雨』（明治二十二年）『南無阿彌陀佛』（明治二十三年）『裸美人』（明治二十五年）、『隣の女』（明治二十七年）『紫』（明治二十七年）『やまと昭君』（明治二十八年）『冷熱』（明治二十九年）『青葡萄』（明治二十九年）『金色夜叉』（明治三十一―三十六年）、川上眉山『黒髪』（明治二十六年）『大村少尉』（明治二十九年）『網代木』（明治二十九年）『神出鬼没』（明治三十五年）『青春怨』（明治三十六年）『觀音岩』（明治三十九年）、山田美妙『嘲戒小説天狗』（明治十九年、亀井一九九三による）『少年姿』（明治十九年）『ぬれごろも初篇』（明治二十一年）『園の二葉』（明治二十四年）『白玉蘭』（明治二十四年）『葛の裏葉』（明治二十四年）『盗賊秘事』（明治二十四年）『漁隊の遠征』（明治三十六年）『滑稽妙な術』（明治四十二年）『滑稽妙な水』（明治四十三年）

・石橋思案「言文一致に附いて」（明治二十二年三月三十一日付『讀賣新聞』、山本正秀『近代文体形成史料集成　発生篇』桜楓社、一九七八）
・伊藤圭介「日本人ノ雅俗文章ニ於ケル。句讀段落ヲ標示スルヲ以テ必要トセサルハ。一缺事タルヲ辨ス。」（明治十四年二月『東京學士會院雑誌』二ノ一〇、山本正秀『近代文体形成史料集成　発生篇』桜楓社、一九七八）
・尾崎紅葉「文盲手引草」（明治二十二年『文庫』二六・二七號、山本正秀『近代文体形成史料集成　発生篇』桜楓社、一九七八）
・浩然堂主人「甕外生の『明治文章の月旦』を讀む」（明治二十三年二月三日『日本之文華』、山本正秀『近代文体形成史料集成　発生篇』桜楓社、一九七八）
・太宰春臺『和讀要領』『漢語文典叢書　第三巻』汲古書院
・芳賀矢一　杉谷代水編『作文講話及び文範』講談社学術文庫、一九九三
・山岸荷葉「故紅葉大人談片」『紅葉全集　第十巻』岩波書店、一九九四
・國語研究會『國定新讀本　句讀法及分別書方』矢島誠進堂、一九一一（「近代デジタルライブラリー」を参照）

附表

	石橋思案	巖谷小波	江見水蔭	尾崎紅葉	山田美妙	川上眉山
明治19年以前					＝＝2	
明治20～24年	＝＝1	「1 (( )) 1	「 」1	( ) 1 (( )) 3	「 」5	
明治25～29年	「1 「 」1 ＝＝1	(( )) 3 「 」2	(( )) 1 「 」2 『 』2	(( )) 2 「 」4		『 1 「 」1
明治30年以降	『 』1	『 』2	『 』5 「 」3	「 」1	『 』2 「 1	「 」3

（はとの・けいすけ　本学大学院博士後期課程）
（ふるた・ゆうすけ　本学大学院博士後期課程）
（いわき・さわ　本学大学院博士前期課程）
（かわなべ・ゆいな　本学大学院博士前期課程）